慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	昭和二十二年三田演説館修復披露記念講演会
Sub Title	Speeches commemorating the restoration of "Mita Enzetsu-kan" in 1947
Author	山内, 慶太(Yamauchi, Keita)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2015
Jtitle	近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese studies). Vol.32, (2015.) ,p.31- 66
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 : 演説館開館一四〇年 資料解説
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20150000-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料解説

昭和二十二年三田演説館修復披露記念講演会

山内慶太

一、慶應義塾にとっての昭和二十二年

昭和二十二年は、甚大な戦災を被った慶應義塾が復興に向けて確かな歩みを踏み出した年である。創立九十年を祝うに当たって、「創立九十年記念趣意書」には次のように記されている。

今年は慶應義塾の創立九十年に当たるので、社中相集まって之を祝い、旬日に亘って記念祭を催すことにした。一つにはこの折に慶應義塾の教育精神を日本国中に普く説き弘める啓蒙活動を起し、また一つには百年祭を目指して今後十年に慶應義塾を昔にまさる盛んな学園に建て直そうと、広く天下に呼びかけるにある

慶應義塾は一八五八年の創立であることから満九十年は一九四八年になる。しかし創立九十年は一年早い一九四七年に数えで祝って、復興への弾みをつけたのであった。

戦後の義塾の復興を考える上で、特に昭和二十二年という年は重要である。それは第一に、前年までの終戦後の応急の対応から、復興に漸く歩み出した年と言えるからであるが、第二に、極めて困難な状況にあってなお、福沢諭吉以来の慶應義塾の理念に対する自負と気概が再確認された年だともいえるからでもある。それは、前述の趣意書に「一つにはこの折に慶應義塾の教育精神を日本国中に普く説き弘める啓蒙活動を起し」と示されている通りであるが、創立九十年記念式典の塾長潮田江次の式辞によく表れている。潮田は、慶應義塾が「国民の間に封建思想を根断やして、独立自尊の風を植えつけようと率先力を尽しました。官権軍閥の力と闘って、自由民権のために闘ってまいったのであります」と語り、新憲法と教育基本法を挙げて次のように述べたのであった。

この時にあたり、義塾がこの伝統の精神をもって国民の先導を勤めなければならないことは明かであります。私どもはこの九十年祭を機会に国民の一大啓蒙運動に乗り出すことにつきまして、最も当然な権利をもち、かつ義務を課せられておるものと自認いたすのであります。

このような状況を知る上で、当時の講演、式辞などの記録が大切になる。しかし、『三田評論』は、昭和十八年十・十一月合併号を最後に、二十六年に復刊するまで休刊となったままであったため、殆ど活字化されて

いない。例えば、創立九十年記念式典の塾長式辞も『慶應義塾百年史』に一部を略して掲載されているのみで、全文が掲載されたものはない。来賓の祝辞も『百年史』には殆ど掲載されておらず、今日活字でその内容を知ることは出来ないのである。それだけに、当時の速記録等の再録は重要である。

二、速記録について

創立九十年記念式典をはじめ、昭和二十年代の速記録が福沢研究センターのロッカーに保管されている。例えば、『慶應義塾大学病院本館落成祝賀式速記録』（昭和二十三年十一月五日）、『福沢先生誕生記念会及福沢先生銅像除幕式講演速記録』（昭和二十九年一月十日）等がある。いずれも表紙に塾史編纂所の原稿用紙に概要を記したものが添えられており、他に古い時代を知る義塾関係者への「塾史編纂所主催座談会速記録」も一緒に保管されていることとからも、『慶應義塾百年史』編纂の作業の過程で塾史編纂所に収められたものであろう。ここで紹介する講演会速記録も同じロッカーの中で見出したものである。過去に活字化されたことが無い為、速記録を全文掲載することにした。

この速記録は、わら半紙状の紙に鉛筆で記されている。そして、その表紙には鉛筆で、

昭和二十二年七月十九日（土曜日）
三田演説館修復披露記念講演会速記
於　慶應義塾・三田演説館

とある。その表紙には、丁度「於」の右上に「潮田」、「神崎」の印、「永澤」のサインがあり、その行の左下隅に「川島」の印がある。「潮田」は塾長潮田江次、「神崎」「永澤」は常任理事神崎丈二、同永澤邦男であり、「川島」は理事の川島二郎である。これらの印、サインは、速記録を確認したことを示すものであろう。なお川島は、大正十年大学部理財科卒業、帝国銀行鶴見支店長を経て、二十二年五月より常勤の理事の職にあった人で、塾監局職制改革により二十五年に初代の塾監局長に就任した。

この表紙の上に、更に、もう一枚、「慶應義塾塾史編纂所用」と脇に印字された原稿用紙に、万年筆で

三田演説館修復披露記念講演会速記録
昭和二十二年七月十九日（土）
三田演説館にて

と記したものを重ねて製本されている。

三、演説館の修復

慶應義塾は昭和二十年の空襲で多くの建物を焼失した。三田の空襲については『塾監局小史』に掲載の昆野和七による「空襲下の三田山上」に詳しいが、五月二十四日未明の空襲で、現在の中等部の地にあった普通部

は雨天体操場以外が全焼、女子高の地にあった綱町研究所も大部分は焼失した。そして、二十五日深夜から二十六日未明にかけての空襲は烈しく、木造校舎は殆ど全焼し、残ったのは塾監局、学部新館（現第一校舎）、現在の研究室棟の位置にあった鉄筋校舎、そして演説館のみであった。大講堂も壁を残して全焼し、図書館も書庫部分への延焼は辛うじて食い止めたものの、屋根は焼け落ち、ホールや閲覧室等の部分は相当の損壊があった。

演説館は、元々は塾監局と図書館旧館の間くらいの位置にあった。しかし、関東大震災後の大正十三年に防災上の理由で現在の位置、つまり三田キャンパス南西部の稲荷山に移築されていた。そのお陰で焼失せずに済んだのではあるが、相当の幸運もあった。空襲時の演説館の状況を昆野は次のように記している。

演説館わきには数条の火焔があがるのを認め、最早由緒ある建物は潰滅したかに見えた。翌朝本部員が現地検証してみると、落下した大型焼夷弾は約十六発、その中演説館附近に落ちたものは五発で、最も近いのは北側壁から一メートルのところに一発、地面に穴をあけていた。全く危ないところであった。

演説館周囲は木立に囲まれ、延焼する可燃物が無かったことが幸いしたのであろう。

敗戦後も、図書館の書庫部分の屋根の修復を除いては、殆ど施設の復旧・建築はなされないでいた。その中でようやく最初になされたのが演説館の修復であった。『慶應義塾百年史』は、「（昭和二十二年）五月から九月にかけて、三田演説館の修復をはじめ、福沢記念園の建設、学園緑化運動の展開および天現寺地区における普通部校舎の増築などが行われたことは、この復興機運をいっそう強めた」と書いている。本格的な建築事業

は、二十三年からはじまるが、各種復興資金の募集は九十年記念式典をきっかけに急速に進展した。演説館の改修は神崎丈二と同じ明治四十四年幼稚舎卒業の同級の会、四四年会の寄附によるもので、総工費は二十五万五千四百三十五円であった。神崎は後に当時を振り返って語っているのでその一部を紹介したい（中央公論、昭和三十六年六月）。

二月にはじめて出勤して、三月のはじめに演説館の改修を金は一銭もなかったけれども、無理に始めたんです。何かやらないと、復興に着手したという感じを職員にあたえませんしね。虚脱状態から抜け出せなかったわけです。二十二万円かけて作り直して、私の幼稚舎の同窓会で支持会を作って動員して、スバルという劇場の切符にプレミアムをつけて売ったり、そのときの苦労はなみなみならぬものがあった。

後掲の「開会の辞」において神崎は、「復興を願う塾員の心持というものは、盛り上げられた枯草のようではないか」「この枯草の山に、一本のマッチを投ずる、つまり口火を投じさえすれば、必ず枯草は燃え上がる、そうして塾の復興はなる」と考えを語り、「ちょうどこの演説館の修復ということは、この枯草の山に最初に投ぜられる口火の役をなしたものであると確信するのであります」と述べたが、その後の義塾の復興をみればまさにその通りとなった。

四、修復披露記念講演会

三田演説館修復披露記念講演会では、開会の辞を常任理事の神崎丈二が、挨拶を塾長潮田江次が述べた上で、高橋誠一郎、林毅陸から祝辞が述べられた。潮田が昭和二十二年一月、塾長に選任されると、翌二月、復興事業を所管する財務担当の常任理事に三井生命常務取締役から就任したのが神崎である。神崎は、幼稚舎より慶應義塾に学び、大正十年大学部法律科を卒業、三井物産、三井銀行を経て終戦直前より三井生命に勤務していた。常任理事時代の財務に困窮する中での復興の苦労の一端は「KOボーイ、オールド・ボーイ、頑張れ」（三田評論、昭和四十年九月）でも自ら語っている。三十一年に退任した後は、首都高速道路公団の初代の理事長、日本コロムビアの社長等を務めた。高橋誠一郎は、明治三十一年普通科に入学以来慶應義塾に学び、四十一年に大学部政治科を卒業、大正四年理財科教授となった。そして、昭和五十三年まで長きに亘って経済学史等を講じた。昭和二十一年から潮田の選任まで塾長代理を、二十二年五月まで第一次吉田茂内閣の文部大臣を務めたところであった。なお、高橋は普通部生時代福沢諭吉に親しく接した経験があり、また長命であったので、福沢や塾史に関する多くの随筆を遺している。その中には、昭和五十年、演説館百年の記念講演を収めた「三田演説館回想」（三田評論、昭和五十年六月）、「十年前の三田演説館九十周年記念会にて」（三田評論、昭和五十年八・九月号）等があり、『随筆　慶應義塾　続』（慶應通信刊）に収められている。林毅陸は、明治二十二年より慶應義塾に学び、二十八年に大学部文学科を卒業、三十八年より政治学科教授として外交史等を講じた。また、大正十二年から昭和八年まで塾長を務めた。なお、世紀送迎会の「世紀送迎の辞」によって雄弁家としてもよく知られた人でもある。昭和二十一年からは愛知大学の学長を務めていたが、二十五年に没したので、この速記録は最晩年のものと言うことも出来よう。

演説館は、この改修によって演説館としての役目を果たせるようになったのであるが、三田の復興が未だ進

まない中では、演説に留まらない文化活動の場ともなって、演劇、音楽等の学生団体が練習や公演に利用した。卒業したばかりの影絵作家藤城清治も二十三年に連続影絵劇を行っている。ワグネル・ソサィエティやマンドリンクラブの部員達は、戦争末期、演説館内に楽器類が置かれていたので、復学すると演説館に立ち寄った。そして、米兵がティンパニィの中で楽譜や楽器を燃やして焚き火をした無残な跡に心を痛めたという（『慶應義塾ワグネル・ソサィエティ65年史』『慶應義塾マンドリンクラブ七十年史』）。それだけに、三田演説館の修復は潮田が「挨拶」で述べたように、塾生の「精神的復興」に大きく寄与するものでもあった。

三田演説館修復披露記念講演会速記録

昭和二十二年七月十九日（土）
三田演説館にて

次第
一、開会の辞　神崎理事
一、挨拶　潮田塾長
一、祝辞　高橋誠一郎先生
一、祝辞　林毅陸先生
休憩
九十周年祭式典実況映画（外に文化ニュース等）
一、閉会の辞

開会の辞　神崎理事

本日は、お暑いところをお出でくださいまして、ありがとうございました。開会に先だちまして、一言この演説館修復の経緯を簡単に申上げておきたいと思います。

私、本年冬、たしか二月十四日と記憶いたしますが、この学校に初めて—と申しましても卒業以来約二十六年ぶりで、この学校に登校いたしまして、最初に何のことなく私の頭に浮びましたものは、演説館はどうなったであろうかということであったのでございます。その演説館は、無事にこの稲荷山に疎開して、戦禍を免れておるということを聞きまして、非常に嬉しく思うと同時に、この稲荷山に駆けつけて、演説館にはいって見たのであります。ところが、当時のこの演説館の有様は、まだ私の眼前にはつきり浮び出るのでありますが、

この周囲の手摺は全部打ち壊され、天井は剥げ、壁は落ち、正面に「日本演説の由来」という大きな額がございますが、この額の文字は全部剥ぎとられて、額そのものは斜めにようやく引懸っておるという状態で、大体これらのことから御推量願ってもわかりますように、実に惨憺たる荒廃ぶりを呈しておったのであります。助かって、まあよかったという喜びのあとに、実はまことに唖然としたのであります。それから約三週間ばかり経ちまして、三月八日の日に、この山の上で東京三田会がございまして、その日の夕景、私の幼稚舎の同窓生であります四四会の連中が、私のために一夕設けてくださったのであります。その席上、君が三田に帰って仕事をすることになったのであるから、われ〳〵も一臂の力をかそうではないかというお申出がありました。瞬間に、ただちに私の頭にまいりましたものは、この演説館の修復であったのであります。それでそのことを申し出ますと、参会の諸君は、これもほとんど異口同音に、御賛成くださいまして、幼稚舎の会でありまするし、現在までにすでに三十六年を経過しておりますので、現代では会員もはなはだ少数である。そのとき、たしか、十四、五名の方が近年になく珍らしく大勢集っておったのでありますが、異口同音に賛成してくださった。数も少いから、従って事の運びもスムースにまいりまして、三月の十五、六日であったと思います、安藤組の方々に御相談して、ただちに修復に取かかったのであります。ところが、たま〳〵その後に九十年祭の催しが起りまして、幸い九十年祭式典開始直前にこの修復ができ上ったのであります。

私、つね〳〵思うのでありますが、全国に散らばっておる、全国津々浦々におられる塾員、その数大凡四万と数えられますが、多少の心持に厚薄はあろうとも、現在の惨憺たる戦禍をこうむった塾の復興を希わない人はないであろうとつねぐ思うのであります。たとえて申さば、その復興を希う塾員の心持というものは、盛り上げられた枯草のようではないかと考えるのであります。ただ問題は、この枯草の山に、一本のマッチを投ず

る、つまり口火を投じさえすれば、必ず枯草は燃え上る、そうして塾の復興は成る、こう考えておるのであります。何とかこの枯草の山に口火を投じなければいかぬ。これをこの塾にまいるようになりましてから考え続けておりましたが、ちょうどこの演説館の修復ということは、この枯草の山に最初に投ぜられる口火の役をなしたものであると確信するのであります。その後次第に、期待通りに、この塾復興を希う愛塾心は燃え上りまして、御承知のごとく東京三田会において図書館の修復をお引受け願う、さらに阪神三田会で研究室、京都で学生ルーム、また名古屋で大ホール、そのほか小にしては正門を横須賀三田会、最近に手を着けておりまする福沢先生の屋敷跡の小さな公園は、大正十年のE組の手柄でありますが、十E会の手ですでに着工しております。まさに私の期待通り燃え上ってきたと思うのであります。時も時、ちょうど九十年祭という、塾にはまことにふさわしい、まことに喜ぶべき好機会が与えられまして、さらに愛塾の心持は燃え上ってきておると思うのであります。この機を逸しては、塾復興のチャンスは永久に逃れ去る、かく考えますので何とかしてこの燃焼を続けていただきたいと考えておりますのが、現在の私の心持でございます。それで、中には多少むだと申しますか、不必要というような御批判をこうむるような行事なり事柄なりがあるかもしれませんが、要するに、私はこの愛塾の心持、復興の精神の燃え上りを続けたいというために、多少のむだを忍んでも、やっていきたいと考えておる次第でありまして、この点、場所柄を得ませんが、御理解、御了承を賜りたいと考えるのであります。この演説館のことにつきましては、お手許に由来書を差上げましたし、また御列席の大半の方は、ずいぶんお馴染の深い館のことでありますから、十分御承知のことと思うのでありますが、この演説館は、単に慶應の三田山上の宝物であるのみならず、現在では、すでに日本のある意味の記念物になっておるのであります。それが幸いに寸尺と申しますか、私の左手の側、館から一間ばかり離れたところに五百キロの焼夷爆弾が

戦争中落下したのでありますが、幸いにそこが館と反対側がスロープになっておったために、その爆弾が外側に向って爆発した、そのために、この館は災厄を免れたというようなことで、まことに幸運であったのであります。ちょうど終戦後の今日、アメリカとの連絡交渉が非常に頻繁になるにつけても、塾には実は数多く、たとえば独立自尊の精神にしろ、福沢先生のお唱えになった民主主義にしろ、数多く、アメリカと一緒にやっていくには好都合な事由があるのでありますが、この演説館なども、スピーチというものを初めて日本に教え、拡めた記念物として、アメリカ人なんかにも相当に訴えるのではないかと思うのであります。先ほども、実はある先輩からの御注意があって、ここに今日差上げた由来書を英文にでもして掲げようと考えておるのであります。それでこの修復が成りましたのは、先ほど申し上げましたように、明治四十四年にこの幼稚舎を卒業しました四四会の有志諸君の御計画によるのでありまして、なかんずくこの四四会諸君のうちで幹事の役を務めてくださった白井、志賀、米津三君の御努力に対しては厚くお礼申上げる次第であります。なおまた、この四四会の計画に御賛成くださって、いろ〳〵と御協力くださった各位にも、厚くこの機会にお礼を申し上げます。それから、安藤組が犠牲的精神をもって、塾の復興の第一着であるこの修復を、まことに見事にやり遂げてくださったことについては、安藤組の皆様にも厚く〳〵御礼を申し上げる次第であります。私の御挨拶はこれで終ります。（拍手）

挨拶　潮田塾長

今日この演説館の修復が成りまして、皆様にお集りを願って御披露いたす事になりました。それに当りまして私が第一に感じますことは、非常に昔を思い出して懐しい。まづ懐しい気持でいっぱいだと申しても差支え

ないのであります。私が幼稚舎から普通部、大学と塾に通っておりますときほとんど毎日このそばを通った。その時分はまだ御承知のようにこの演説館は塾監と図書館との間にあったのであります。あすこを毎日通って、そのうちにその窓から中をのぞくような、初めのうちは多少気味が悪かった。それがだん〳〵慣れてきまして、今度は少しずつ中に入る、中に入って人が話をしておると暫く聴いてみる。そのうちに今度はその話がだん〳〵面白くなってきて、しまいには坐り込んで話を聴くというような工合に、だんだんこの演説館となじみになりまして、そのうちに普通部になってきてからは—普通部においでになった方は御承知でありましょうが、ここで修身の話がありました。われわれはそこに坐って川合先生でしたか、話をされた、その修身の話を聴く。それで筆記をしたかどうかは私は覚えておりませんが、とにかくその話を聴いて何かあとで書いて出すとそれに点がついてくる。そういうようなことで修身の時間はいつもここであります。そのうちに自分でもここに出てくるようになりまして、自由自在にこの中を駆けまわって、実はここへ来て話をするというだけでなく、ほとんどここを遊び場にしたようなこともありました。そのはしご段から駆け上ってこっちのはしご段を降りる、また楽屋裏に入って友達と騒いで、あるときはお茶を飲んだり、餅菓子を食ったりした思い出もあります。ほとんどここを自分の家のようにして懐しんだものであります。そのときもずいぶんこの演説館というものは汚く荒れておりました。決してこんなような綺麗なものでなかったのであります。しかしこれを神崎君も申されましたが、つい最近のこの演説館の汚れ方、荒れ方と較べてみると全然意味も違いますし、荒れ方の程度も違っておりまして、最近は実にひどいものだったのであります。これは大体終戦後ひどくなったように私は覚えております。この塾が五月の爆撃でやられまして、先ほど神崎君の話にもありましたように、直ぐこの楽屋の入口のそばに焼夷爆弾が落ちて、私が直ぐ来て見たときは楽屋の入口は少し焦げておった程度で、直ぐそばだっ

たが、幸いにここは助かりました。その後私がここを見に来ましたときにはこの中の荒れ方はずいぶんひどいものでありました。ほかももちろん荒れた。大ホールなども焼けて、その玄関には何か西洋地図の掛図が放り出してあって、誰も近づけようとしない、奪ってゆく人もなかったようでありますが、とにかくなりほうだいにしてあった。それ以上にここは荒れておりまして、この中をのぞいたときにそこらは何かいっぱい書類のようなものがここに放り出してありまして、雑誌の古いものもそこにたくさん積んであったり、その中で一番目についたのは福沢先生の肖像で、その辺の床の上に放り出されておって、誰も見向きもしなかった。そのとき私は実際慶應義塾の道義は地に墜ちたと感じたのであります。まことに情ない話でありますが、幸いにして今日の塾生はそんなことを黙って見ておるような者は一人もいなくなりました。むしろ以前に較べて塾の精神というものが誇りをもって自ら口にも出し、行いにも行うような、非常に盛り上った気持になっております。その点は御安心を願います。とにかく一時はそういう状態であった。その後塾の一部にアメリカの兵隊が寝泊りをいたしまして、そのときに更にここは荒されたと思います。先ほど神崎君の話にありました手摺りがなくなったとか、そういうことは、おそらくその兵隊の仕わざであろうかと思いますが、これは私の推測ですから違っておるかも知れません。とにかくその後またひどく荒されたのであります。

それでこのたび四四会の方々の御厚意によりましてこの通り立派に修復ができました。まことに有難いことであります。今日ではこの修復が全部完成しないうちから塾生がたくさん利用させてくれということで申込が殺到して来まして、ほんとうにこの通り椅子も置かれて設備も整いましてからはほとんど毎日この演説館は塾生によって借切られておるという状態でありまして、今日では恐らく塾生が最も楽しく喜んで利用しておる塾の中で一番の建物であろうと思うのであります。それくらいこれは塾生の復興の気運というか、旺盛な積極的

な精神的の復興に貢献をしておるのであります。御承知のように建物の復興という点におきましても、この演説館が塾の中ではさきがけをなしたのであります。同時に精神的の復興という意味におきましてもこの演説館は一番の役割を今日果しておるのであります。この点私はこの修復を思い立たれました四四会の皆様の着眼に敬意を表するとともに、また他に率先してこの修復を引受けられ、この通り立派に仕上げられました愛塾の精神に対してこの席から改めて厚く御礼を申し上げます。今後この演説館が日本の民主政治の確立ということに対して非常に貢献し得るということは演説ということと民主政治ということの関係を私が改めてここで申し上げるまでもなく、民主政治に対して恐らく将来においてこの演説館の名前が結びつけられて、民主主義と慶應義塾のこの三田の演説館というものが必ず後世に伝えられることと信ずる次第であります。もちろんここから民主政治に対してどれだけの貢献をなすかということはこの演説館を利用する方々の心がけ次第でありまして、これも決してたやすいことではありません。明治初年において日本の民主政治のためにこの演説館が大きな役割を演じた。そのときには日本人はまだ演説の何かということも知らないし、またそういったことも思いも寄らなかった。その時代に当って他に率先してこの演説館を開いた。たちまちこれが評判になって、そのときの話によりますと、その二年後には他にも演説館のようなものができたというのでありますが、そのときの努力に較べれば、今日は既に国民一般も演説の何たるかをよく知っておりますし、演説の技術も一般に発達してきております。聴く方も演説を聴くことを心得ておるのであります。その点からはあるいは容易だということができるかも知れません。しかしまたそれにはそれで複雑ないろ〳〵な条件が附加っておることでありますので、その当時とは別な意味で今日演説館を通して民主政治を助長していくということについては困難がずいぶんあることと思う。私は慶應義塾が明治初年においてなしたと同じように、新しい日本の民主精神確立においてこ

の演説館を通して非常に貢献することがあることを固く信じておるのであります。なおその他にも慶應義塾の差当りの問題といたしましてこの間からいろ〳〵の機会で申しておりますが、今日塾の精神を日本全国に普及するということは目下の最大緊急事である。それにはやはり演説、弁舌の力に頼るという要素が非常に多い。ラジオを通し、あるいはいろ〳〵な講演会を通し、あるいはその他の機会において塾の精神を口で述べることによって一般に拡めるということはこれは今日非常に大切なのであります。この意味からもこの演説館が逸早く修復が成って、われ〳〵がこれを利用することができるということになったということは非常に意味の深いことだと思うのであります。この演説館ができましたのは明治八年でありまして、私どもがこの演説館を知るようになったときは既にこの演説館は古色蒼然としておった。まことに私どもの目からみましても何か古風な建物だというような感じがいたしました。ところが今日私ここに立ってみますと、非常に新しい感じがする。もちろんこれはペンキが塗りたて、壁が塗りたてというせいもありましょうが、また戦時中私どもがこういった文化的なものから遠ざかっておった、あるいはこういったものに対して疎遠になるように強制されておったということがあり、またその後東京が焼野原になったというようなことがあって、あるいはこれが非常なハイカラな建物に見えるのかも知れませんが、とにかく私が最初この演説館を見て感じたときよりも、今日ここに立ってこれを見ました感じはずっと新しい感じ、非常にハイカラな建物、立派な建物のように感じる。それでどうかこの新鮮な感じと力をもって再び慶應義塾がその当時恐らく非常なハイカラな建物であったであろうと思いますが、その当時と同じように、日本の新しい文化を最も新鮮な気持、新しい強い力をもって広く呼びかけて新日本建設に貢献いたしたいと思うのであります。

今日はお暑いところを皆様お集まりくださいましてまことに有難うございました。殊に塾の大先輩の方々も

わざ〳〵おいでくださり、また林先生、高橋先生には私のあとでお話をしていただくことになっております。ここには祝辞となっておりますが、祝辞というような固苦しい御挨拶でなく、一つ和やかな昔の思い出なり何なり十分に私ども後輩にお聴かせ願いたいと思うのであります。実は私はその前座をいたしまして御挨拶に立ったような次第であります。それでここに立ちまして感じましたことを申し上げて私の御挨拶に代えた次第であります。

祝辞　高橋誠一郎先生

今日は私、祝辞を述べよという御通知を受けたのでありますが、ただいま川島理事から伺いますと、祝辞よりも何か昔話をしろと、こういう御命令であったのであります。三田演説館の昔話としては、いろ〳〵申し上げたいことがたくさんありますが、ただいま入口で、「三田演説館の由来」と題します富田君の書かれましたパンフレットをちょうだいしました。ごく短い時間でざっと目を通したのでありますが、まことによく書かれてあります。そこで、私これを読みながら考えたのでありますが、諸君を学生扱いにして、はなはだ失礼でありますが、この刷物は皆様おもちのことと考えておりますので、どうかこれをテキストといたしまして、これに若干の註釈を附加えてまいりたいと思うのであります。これをお許し願いたいと考えるのであります。

ここに持参いたしましたものは、「三田演説日誌」と題されておりますところの、明治七年六月二十七日発会以後の記録であります。この慶應義塾に伝わっております古い記録のうちで、最も興味あるものの一つと考えるのであります。後ほどどこかに置きますから、どうぞ手にとって御覧願いたいのであります。こんなふうに記されております。これが「議事演習会記録」と題するところのものでありまして、明治十三年七月に編纂

されたものであります。これが「議事家弁論控」であります。こういった書類が慶應義塾に伝わりますことを私が知ることができましたのは、はなはだ古いことでありまして、明治三十七年のことであります。これを読みまして非常に興味を感じましたので、当時私は予科の学生であったのでありますが、この貴重な書類を借受けまして、当時学生の機関雑誌でありましたところの「三田評論」という雑誌に、三田演説会の歴史を連載いたしたのであります。何分予科の学生の仕事でございますので、今日から見まして、まことにおそまつ至極なものであり、汗顔至極なものでありましたが、とにかくこんなふうにして慶應義塾の歴史を少し調べてみようという考えをその当時もっておったのでありますが、その後に至りまして、まったく慶應義塾の歴史の研究などを忘れておったのでありますが、先年また福沢先生の伝記を少しばかり調べてみました際に、三田演説会に関しまする記録を読み返してみまして、一層また大なる興味を感じた次第であります。

この富田君の書かれました、すなわちお手もとに差上げてありますところの三田演説館記録の第二ページをひとつ御覧願いたいのであります。このことは、すでに諸君御承知のことと思うのでありますが、小泉前塾長のお父さんに当られますところの小泉信吉さんが、何という本でありましたか、これを私まだ発見することができずにおるのでありますが、福沢先生にある一冊の原書を示されたのであります。先生がこの本並びにその他の諸書を参照されまして執筆せられましたところのもの、それがすなわち、ここに記されておりまする明治六年の「会議弁」と題するものであります。

明治六年に、西郷隆盛が征韓論に関しまして議合わず、鹿児島に帰りますに際しまして、彼と同時に職を辞して野に下りました板垣と会談いたしまして、板垣が、民選議院の設立をその畢生の事業とするつもりである、こういう決意をしたと申しましたのを西郷が聴きまして、手を拍ってこれに賛成いたしますとともに、自分は

言論ではこれを達成することができるとは信じ得ないのでありますから、武力をもって政府を乗っ取り、この未曾有の盛事を断行しようとその決意を示したのであります。こういう話が伝わっておるのでありますが、先生は、西郷が腕力に訴え、銃剣によって獲得しようといたしましたところのものを、国民の教育、民力の涵養によりまして確保しようとしたのであります。また板垣がまず議院設立の建白をしようといたしたのに対しまして、先生は、直接にこの民選議院の運動に参加いたしますよりも、むしろ静かにこれに備えまして、その社中をして演説、対論の技を練らしめようとせられたのであります。その結果が「会議弁」となり、また慶應義塾における演説の練習となったものと解釈してよかろうと考えるのであります。このことは明治七年の二月二十三日に京都慶應義塾—この京都慶應義塾と申しますところのものは、明治七年の正月に設けられました慶應義塾分校であります。もはやこのころには、慶應義塾の分校と称せられるものが各地にできたのでありますが、これもその一つであります。その慶應義塾の分校たる京都慶應義塾におられましたところの荘田平五郎氏に宛てました手紙の中に、この間の消息が窺われるのであります。「此後は専らスピーチュの稽古と精々煽動いたし居候。行々は彼の民選議院か、又は役人院か、書生院か何か出来可申、其の節は義塾の社中に限り、明弁流る、が如しとして、落を取らんとするの下拵なり。」こう記されておるのであります。まず慶應義塾の社中が弁舌を練って、そうしてどういう形のものであり、いかなる内容のものであるかは知らぬが、とにかく国会が開かれるようになったときには、特に慶應義塾から雄弁家を壇上に送るということにしたいものであると、こう先生は荘田平五郎氏宛の手紙の中で述べておられるのであります。

それから、このパンフレットに記されておりまするスピーチ及びデベートの翻訳のことでありますが、このことは年代が少し違っていやしないかと思うのでありますが、明治二十三年三月に発行せられました「交詢雑

誌」第三百二十四号に、「慶應義塾紀事」というものが載っております。それによりますと、明治七年の夏と書いてあるのでありますが、私はもう少しこれは早いのではないかと考えます。とにかく明治二十三年に記されておるのでありますから、少しく間違いがあるのではないかと思いますが、確証はむろん得ておらぬのでありますが、福沢先生は当時の塾員及び教員諸氏をこの三田の山上に集めまして、学術進歩のことを議せられたのであります。先生まず説いて言われますのに、「凡そ学問芸術の発達普及を希います者は、ただこれを学塾教場内の研究にのみ委ねてもって足れりとすることができないのである。西洋諸国にはスピーチ並びにデベートの法があって、ともに学術中重要なる地位を占めるものである。今日これらの技をわが国に輸入いたしまして、もって学術の進歩に資せんとする、蓋しまた無用のことでないと信ずるのである。これに関しまして諸君の御意見いかがであるか」と、こう問われたのであります。会衆いずれも皆これに賛成いたしまして、一人の異議を唱える者もなかったのでありますが、時に起って叫ぶ者がありました。「何事にもあれ、一事一物を世に普及せしめんと欲しまする者は、すべからくまずわれよりこれを始めなければならぬのである。はたしてしからば、ここにスピーチ、デベート等の原語を和訳するの必要を見るのである。」こういうことでありまして、この言葉の訳字につきまして議論が沸騰したのであります。ある者は、スピーチの方を談論、デベートの方を問答と訳したらどうか、こう言うのであります。他の者はこれを講談及び弁舌と訳そうではないかという意見を出しておるのであります。かくして議論は容易に底止するところを知らなかったのでありますが、ようやくにして衆議はついにスピーチを演説、デベートを討論と訳することに決したのであります。ところが、こういうようなことを慶應義塾の人たちが申しておりますと、世間ではまた、はなはだ快く思わない人間たちがあるのでありまして、何か西洋文明を輸入したのは、慶應義塾だけの力であるかのごとくに言い触らしておる、け

しからぬとでも思うのでありますか、いろ〳〵それに批判を加える者があるのであります。たとえば、この点に関しまして宮武外骨さん—廃姓外骨とも言っておられましたが、この人の書きました「明治演説史」を見ますと、演説という熟語は、福沢先生の新案ではなく、わが国に古くから行われておったものである。幕府の「公裁秘録」などの類を見ると、たくさんに出ておる言葉である、こう言っておられるのであります。しかしながらこの富田君の書かれましたものの中にも、ちゃんと記してありますように、決してこれは福沢先生もしくは慶應義塾の先輩が特に新しい言葉を製造したという意味にとるべきものでないのでありまして、英語のスピーチという言葉は、今まで時折使われておりました「演舌」あるいは「演説」という、この文字をもって翻訳したと考うべきであると思うのであります。

それから、なおこの建物のことが記されておるのでありますが、「三田演説館の開館」と題する記事が五ページあたりに出ておるのであります。この建物は、先ほども潮田塾長からいろ〳〵お話のありましたように、さほどりっぱなものとはむろん言えないのでありまするし、また、広い建物ともむろん称することができないのでありますが、当時におきましては、相当世間を驚かした建物でありますし、また慶應義塾の学徒も非常に得意になっておったかのように考えられるのであります。ここに建坪などが記されてありますが、古い記録とは幾分違うようでありますが、大体同じであります。間口五間、奥行十間、五十七坪余の西洋館というふうに記されております。「屋宇高爽、清潔にして華美に走らず、結構西国の会議院を摸す」と、こんなようなことも記されております。また「この館や壮麗広大にして、数百の人員を容るゝに足る。且つ其の結構縄墨の宜しきを得て、声音大ならざるも室内の四隅に達し、恰かも演説用に適せり。」こうも述べられておるのであります。実際この演説館は、はなはだ話のしよいところと昔から言われておったのであります。この点は、この隣りの

大講堂とは著しい違いがあるのでありまして、大講堂は、はなはだ話のしにくいところであったのでありますが、小さいせいもありましょうが、この三田演説館は、はなはだ話がしよいと昔から申されておったのであります。「その観の美、その構の良、両つながら人意を快にするに欠くる所なし」とも記されておるのであります。これは福沢先生が、私財二千数百円を投じまして、—わずかに二千数百円、これは私、先年ある雑誌にこのことをちょっと書きました。ところが、二千数百円は多分私の書き間違いでもあろうと思ったものでありますか、二千数百万円と訂正されておったのであります。今日から見ますると、これが二千数百円でできたとは、夢のような話でありましょう。ここに富田君のパンフレットに記されておりますように、米国における諸会堂の図面を参考にいたしまして、設計せられたものであると聞いております。この開館式の際に、小幡先生が述べられました言葉が残っておるのでありますが、「嗚呼、福沢君既に其の室を金玉にす、演説に此の室に従事するもの、亦何ぞ其の言を金玉にせざるべけんや。」こんなふうに述べられておるのであります。先生のお蔭で慶應義塾の生徒は、りっぱな演説館をもつことができたのでありまして、この中における演説もまたりっぱなものにしなければならぬ、こういう意味のことを述べられておるのであります。三田演説館のできましたのは、明治八年のことでありますが、しかしながら、三田演説会の歴史は、さらにそれよりも古いと申さなければならぬのであります。明治七年の六月二十七日、これが三田演説会のできました時であります。そして最初の弁論会が開かれましたのが、七月一日のことであります。ですからして、ちょうどこの明治七年の六月に三田演説会が成立をいたしまして、それから明治八年の四月に三田演説館が開かれますまでが、ちょうどこの三田演説館の前史、フォアー・ヒストリーに相当するものとお考えになっていいと思うのであります。この演説館において行われましたところの演説会に先だちまして、討論会が行われておったと考うべきではないかと思

われるのであります。この記録に残っておりますところのものは、最初は悉くみな討論会であったのであります。この点に関しまして、いささか疑問がありまして、鎌田先生の生前におきまして先生に私は伺ったのでありますが、鎌田先生は、「三田討論会というものと、三田演説会というものとは違う。お前の言うのは討論会の方であって、演説会は別にあったのだ。」こういうことを言っておられたのでありますが、しかしながら、この記録は先ほどここでその標題を読み上げましたように、三田演説の記録ということになっておるのでありますからして、やはり三田演説会がこういうような形をとっておったものと解釈すべきではないかと思うのであります。また別に三田演説会の記録というようなものが発見せられましたならば、別でありますが、それまではやはり三田演説会がかくのごとき討論会の形成をとって、まずその会を進行させていったものと考えていいのではないかと思われるのであります。

その討論の様子が、ここにごく簡単に記されておるのでありますが、問題を前から出しておくのであります。そうしてこれにつきまして、会員がいろ〳〵研究いたしまして、次の会において自説を述べる。こういうようなことになっておったのであります。われ〳〵の学生時代まで、やはりこういう形が残っておりまして、私どもごく幼稚な討論会などを始終やっておったのでありますが、その際などにも、凡そ一箇月くらいも前、あるいは二週間くらい前から演題を出しまして、そうしてそれによって相当考えた後において討論が開始せられる。それで私どもどういうふうに述べていいかわからぬので、福沢先生にお伺いして、自分はこういう討論会に参加することになっておるのであるが、どういうふうに話をしたらばいいであろうかというやうなことを伺った記憶などがあるのであります。先生まことに雄弁でありまして、お前は右の議論をしようとするのか、左の議論をしようとするのか、私は右の方に賛成するものであると申しますと、それならばこういうような議論がで

きると言って、滔々二十分も三十分も意見を述べられるのであります。そうしてまた急に、しかしもしお前が左の方に加担しようとするならば、またこういう意見も述べることもできるぞと言って、また同じように二十分も三十分もいろいろ話をしてくださるというような記憶があるのでありますが、当時はずっと相当な長い間、討論会の形において三田演説会が行われたものと解釈していいのではないかと思います。

一番初まりの演題、これが第四ページに記されておるところのものでありまして、「台湾征討軍の勝敗に依って日本国の得失如何」というのであります。これは富田君はこういうふうにごく簡単明瞭に記されたのでありますが、原文はもっと長いのでありまして、そしてまた、はなはだ悪文とでも申しましょうか、ちょっとへんてこりんな文章になっております。「当今日本より台湾征討として既に出兵に及びたるが、今日本の有様を考ふれば、我が兵の敗衂すると勝利なると孰れが便利なるや問題。」こういうことになっておりまして、この問題をきめましたのが、六月二十七日でありましたか、そうして討論会の開かれましたのが、七月一日ということになっておるのであります。この台湾征伐、これはもう事新しく申し上げずとも、既に御承知のことと思われるのでありますが、政府は西郷隆盛の征韓論を抑えることができたのでありますけれども、しかしながら、当時の不平士族をほんとうに鎮圧することができませんで、西郷の弟、従道によって行われましたところの台湾征伐、すなわちこれは小規模の征韓とも見るべきであったでありましょうが、ついにこれを許さなければならなくなったのであります。従道は二十八才であったと伝えられております。台湾蕃地事務都督という名前であったのでありますが、出征中止の勅令が出されたのでありますが、従道はこれに応じません。従道は御璽を鈐した勅書を首にし、進んで生蕃巣窟を衝き、死して止むばかりである。事若し清国に牽連し、葛藤を生ずるが如きことあらば、我が政府は従はしむるに、脱艦脱賊の名を以て、清国政府の口を塞ぐ可きのみ。」とこう

申しまして、中央の命令を聴きません。そうしてまず参軍の谷干城と赤松則良などが、日進、名光、孟春、三邦などの艦船を率いまして長崎を出帆し、一挙にして台湾二十八蕃社を威圧しようと企てましたのが、明治七年五月のことであります。この月の十八日の「新聞雑誌」―この「新聞雑誌」と称しまする新聞は、木戸孝允の息子のかかっておったものだそうでありますが、この「違勅出師」を諷示いたしましたところの「夕ぐれ」の替唄などを載っけておるのであります。まあ世間にはこの台湾征伐に大変快く思わなかった者がおったように考えられるのであります。この替唄も有名なものになっておりますので、御承知の方もありましょうが、

夕ぐれに眺め見渡す瓊の浦
君の仰せを余所にして
帆かけた船が出づるぞい
あれ民が泣く、民の声
都に名将はないかいな

と称するものであります。木戸孝允は参議であり、文部卿を兼ねておったのでありますが、内務省におきましても、文部省におきましても、これに対して反対する者がすこぶる多かったのでありますが、しかしながら軍を抑える力がなかった、実につらいことであるということを申しておるのであります。彼はついに「欺心の大臣」たることができないと称しまして、四月十八日に書を三条実美に送りまして、辞意を表明したのであります。心を欺く大臣となることはできない。こう申しておるのであります。これより先に、伊藤博文に宛てました手紙の中におきまして、征台に対しましては、内心大の不同意であるに拘らず、これを抑えまして、「茶を濁し」ておる苦衷を訴えておるのであります。「茶を濁す」という言葉を使っておるのであります。「浮世にも

かかる地獄がこれ有り候かと涕泣の仕合に御座候」というような言葉も漏らしておるのであります。ちょうどこの三田演説会におきまして、まだこの演説館はできておらなかったのでありまして、出版社所有の建物の一部で行われた討論会でありましょうが、台湾征伐の利害を論じました七月の一日には、ちょうど十八蕃社の酋長が相ついで投降したころであったと言われておるのであります。

この演題につきまして、最初に意見を述べました人は、海老名晋という人であります。これは「ススム」と読みますかどうか私はよく存じませんが、この「自吾作古」篇にその当時演説をされました先輩の名前がずっと出ておりますが、海老名晋の名前が落ちております。海老名という方は日向延岡の人でありました。明治元年に慶應義塾に入学いたしまして、同四年から慶應義塾に教鞭を執っておられたのであります。この明治七年には二十八才であったと言われております。海老名氏の意見は、「縦令ひ我が軍が勝利を得まして、台湾島を奪ったとしましても、我が国はこれによりまして、毫も利益を受くるところがないのである。しかしながら、わが国は今や世界の舞台に初登場せんとするの時である。もし戦利あらずして軍を帰すようなことがありましたならば、国辱これに過ぐるものはないであろう。傲慢なる列国はます〳〵わが国を軽視するに至るべきである。」こういうのであります。世界の舞台に初登場したのである。この戦争に負けたならば、ます〳〵世界各国からばかにされるのであるから、どうしても勝ち抜かなければならぬのであるという趣旨であったのであります。

次いで起ちましたのが、中津の猪飼麻次郎さんであります。この猪飼麻次郎という方は、後に慶應義塾の塾頭に挙げられたと聞いております。慶應義塾の塾頭とか塾長とかをした人は何人あるのであるか、これも私学生時分にちょっと調べてみたのでありますが、どうもはっきりしないのであります。当時まだ生き残っておられた方などもありまして、いろ〳〵説を聞いてまわったのでありますが、その中には、おれは確かに塾長をし

たと言っておられるのでありますが、他の先輩のところに行きますと、なあに、あの男が塾長などしたことはないというようなことを言われまして、どうもはっきりいたしませんが、塾頭であったか塾長であったか名前ははっきりいたしませんが、とにかく慶應義塾の塾頭もしくは塾長の職に挙げられた人と聞いております。猪飼さんは海老名さんを駁して言われますのに、「もしこのたびわが軍が勝利を得ましたならば、軍人はます〳〵意気あがり、ついには師を清国に出すこととなるであろう。微弱なるわが国力をもって兵を大清国と交えまることは、実に危険これよりも大なるはない。」こういうのであります。

次に起ちましたのは、土佐の安岡雄吉氏であります。これは慶應義塾の先輩といたしまして、相当輝かしい名前の方であります。安政三年の生れでありまして、大学南校から慶應義塾に転じまして、卒業後官海にはいり、五年にして辞任いたしまして、後、後藤象次郎の大同団結に加わりまして、筆をその機関誌「政論」に執りまして、新聞条例に触れまして重禁錮に処せられ、たまく憲法発令に際しまして、大赦の恩典に浴しまして、刑の執行を受けることを免れ、明治二十五年の総選挙には郷里の高知から選出せられましたが、訴訟が起りまして無効となるなど、かなり数奇な運命を辿った人であります。安岡氏の論旨は、「今次の戦没に勝利を得ましたならば、悄沈したところの日本国民の気力は、これによりまして大いに挽回せられることとなるであろう」というにあったのであります。

安岡氏の後に起たれましたところのものが、福沢先生であります。この討論会の記録をずっと見ておりますと、先生必ずしも真打を勤めてはおられないのでありまして、中途で話を始められた場合がかなりに多いようであります。この時もまだあとに弁士が相当に現われるのでありますが、安岡氏のあとに、先生がただちに起って申されるのであります。先生は台湾征伐にはむろん多大なる関心をもっておられたと見えまして、そのころ

木挽町の精養軒で開かれました明六社の集会におきましても、またこれを論じておられたということであります。先生は前弁士、すなわち安岡さんの説を否として申されまするのに、「現時の国内経済状態を見まするのに、むしろ皇軍の敗北によって利せらるるところ多きがごとくである。しかのみならず、今回の事変に関しまして、清国政府から派遣せられました使節は英国人でありまして、またプロイセン国はこの島に移民しようとする企てがあると聞いておるのである。蓋し今日の一勝は後日の百難を生ずるの因となるべきである。」というのが先生の意見の大体であります。

それから先生の後に起ちましたのが甲斐織衛さんであります。この人もかなりおもしろい閲歴の人でありまして、二回の長州征伐並びに会津城攻めにも参加しておられたのであります。それから大阪鎮台に赴きまして、英国式の調練を学習した中津藩士でありまして、後、藩費をもらって慶應義塾に学びまして、卒業後教育界にはいりまして、現在の神戸経済大学の前身――一時何と申しましたか、以前は商業大学と称しておったものでありますが、その神戸商大前身でありますところの神戸商業講習所の開設と同時に、聘せられまして同校長となったのであります。この当時商業教育、そのほかの学校に慶應義塾の人たちが力を与えましたことは非常なものでありまして、神戸の商大がかくのごとくでありますし、これは慶應義塾の人たちは忘れておるのでありますが、大阪の商大、これがまた慶應義塾の力によってまずできたところのものであります。このことなどは、かえって慶應の人よりは、よその人の方がよく知っておるのでありまして、あの尨大な大阪商大の歴史を繙かれますと、最初に出てまいりますものが福沢先生並びに慶應義塾の大先輩加藤政之助氏であります。甲斐織衛さんは、商大の建設にあづかって力の非常に大なる方でありましたが、後、実業界に転じまして、福沢先生の勧告によりまして、サンフランシスコに甲斐商会を興すに至った人であります。氏の意見はこういうのでありま

す。「台湾の地味は敢て肥沃というではないが、またもって数万の人民を移植するに足るものである。多く不平士族から成る我が軍人を永くこの島に停住させて、生産の道を教へたならば、国家は終に彼等の煩ひを脱することが出来るであらう」という意見でありました。

この甲斐さんに続いて起ちましたのが、須田辰次郎さんでありました。須田さんは甲斐氏に比べまして年は三つほど若かったのでありますが、同じく中津藩士でありまして、やはり後には教育界から実業界に移った人であります。すなわち福岡、神奈川、岩手、佐賀の各師範学校に長として地方教育に努めました後、翻然悟るところがありまして、実業界に転身せられまして、輸入販売業に従事するに至ったのであります。これは御承知でありましょうが、須田君のお父さんに当られる方であります。私事を申してはなはだ恐縮でありますが、私は横浜に育った者でありまして、私のはいりました小学校、これは老松尋常高等小学校と申すものでありますが、これが当時は神奈川県師範学校の付属小学校であったものでありますから、師範学校の校長先生が、やはり小学校の校長先生でありました。最初私入学いたしました時に、いろ〳〵話を伺うことのできましたのが、須田辰次郎先生であったのであります。須田氏は非常に記憶のいい方でありまして、この三田演説会のできまする当時のいろ〳〵おもしろい話をたくさんにもっておられました。大正五年一月十日の福沢先生記念会におきまして、非常におもしろい懐旧談をしておられるのであります。「余の在塾中における珍談奇聞」と題するものであります。先ほど述べましたように、まずわれ〳〵は内緒で弁舌を練らなければならぬ、こういうので他人の傍聴を許さないで内密に演説の稽古をしておった頃の珍談奇聞であります。これは昭和六年に出版されました福沢先生研究会編の「我が福沢先生」と題します小さな本の中に載っておるのであります。もしこれがお手にはいりましたならば、御一読願いたいと思います。非常に興味のある物語が述べられておるのであります

す。須田氏はこの七月一日の討論会の際に述べられますのに、「戦勝の結果、台湾を占領したと仮定したならば、政府は必ず生蕃熟蕃を鎮圧するがために、鎮台を特設するの必要を感ずるであらう。九州鎮台の経費にさへ悩んでいる我が国庫は、さらにこれに倍加した経費を支出しなければならぬ。これ即ち吾人が敗北を以って利益であるとする所以である」というにあったのであります。

最後に立ちました方が松山棟庵さんであります。これもわれ〳〵にとりまして非常に親しみのある名でありまして、よく松山棟庵さん、棟庵さんと申しておりました。すぐこの下で開業をしておられたのであります。松山さんは数代相継ぎましたところの和歌山県の医家に生れまして、慶應二年に慶應義塾に入塾されました。つとに英文医書翻訳の嚆矢と称せられましたところの「窒扶斯新論」を出版されました。英語でもって医学を教授し、ドイツ医学崇拝の官学に対抗せんとしたところの慶應義塾医学所の校長となった人であります。当時非常な秀才であったらしいのでありますが、われ〳〵知るようになりました当時は、まことに好々爺でありました。よく風邪をひくとか腹下りをするとかして見に行ってみますと診察はろく〳〵しないで、いろ〳〵世間話をしたり、若い学生をひやかしたりして帰されるようなことがたび〳〵あったのであります。それは福沢先生と参向して広尾の別荘にまいりましたときに、池に菖蒲が咲いておりました。その菖蒲の中に水鶏が、巣をつくっておる、それについて、何か忘れましたが、発句が記されておったのであります。福沢先生これを見て、「松山棟庵さんが詠んだ発句である。医者よりはよほど発句の方がうまいよ」というようなことを言っておられたことを記憶しております。慶應義塾の校医と申しますか、長く勤めておられた方であります。松山さんのお説は次のごとくでありました。「皇軍が勝利を得ましたならば、軍人の権勢はいよく強大となり、ついには日本の政権はまったく彼らの掌中に帰するに至るべきである。国家の前途を思いましたならば、むしろ彼らが

速かに敗戦の苦杯をなめて帰国するをもって利益多しとするのである。」こういう意見を述べておられるのであります。

なおそのほか、いろ〳〵興味ある討論題を掲げまして、慶應義塾の諸先輩並びに福沢先生が議論を闘わしておられるのでありますが、一々それらのことを申上げることは省略いたしますが、とにかく爾来星霜七十三年になりまするか、われ〳〵は今敗戦国民といたしまして、この古い記録に対しまして実に感慨無量であるのであります。ここに明治八年に新築せられましたところの三田演説館が、再びその当時の装いを新たにいたしまして、ここにわれ〳〵を迎えることになりましたにつきまして、先ほどの小幡先生のお言葉の中にありましたように、すでにその室が金玉となったのでありまするから、われ〳〵の言論もまた金玉にしなければならぬ、その内容をさらにりっぱなものにしなければならぬという感慨がまことに深いのであります。当時まだ生れておりません私、私の生れまする十年以前のことであったのでありますが、今日となりますと、私もすでに年老いまして、この演壇に起って侃々諤々の議論をすることもおそらくできなかろうと思うのでありますが、ただ後進の諸君の御努力によりまして、いよく三田演説館の歴史に栄えあらんことを望んで、このお話を終ることにいたします。（拍手）

祝辞　林毅陸先生述

大分時間が経ちまして、あまり長くお話するのも如何かと思いますが、暫くの間何か思い出話でもいたしたいと思います。

この演説館が四四会の諸君の御好意によって立派に修復ができまして、まことにこれは有難いことでありま

す。私としても第一に厚く御礼を申し上げたいと思うのであります。この三田の山の上において最も歴史のある最も貴重な建物であるこの演説館が再びこういう立派な装いができまして、慶應義塾の教育の上に立派な、また働きができるということは、非常に喜ばしいことであります。何か思い出の話ということでありますが、ただいまもいろ〳〵当時の思い出のお話がありました。私が塾へ入りましたのはどちらかといえば、まあ塾の古い方のしまいごろ、明治二十三年に大学が設けられるということになりまして、それから慶應義塾の教育も新たな時機になりましたが、その前の年の二十二年、まあ古い慶應と新しい慶應との境い目くらいのところで入学したようなことであります。その明治二十二年ごろにもこの三田演説館は非常に重要な役割を演ずるものであって、毎月福沢先生がおよそ二回ぐらいこの三田演説館でお話をなすった。その三田演説会というのは先輩学生うちまじって勝手な気焔を上げるのでありますが、そうして最後に福沢先生がお話になり、当時は電燈もガスもない。ランプをつけて福沢先生がこの壇に乗られて、そのランプの上に紙で自分で傘を着せて、それから原稿を読みつつお話を始められるというようなこともよく記憶にあります。私が明治二十二年の春入学いたしまして、まだ田舎の少年で、十八年でありますけれども、田舎の小僧で、童子寮へまづ入れられましたが、その童子寮で盛んに演説会を開いておる。しばくこの演説館に銘々ランプをもっていって、代る〳〵一つのランプをもっていくのでありますが、それを演壇の上において、下の机を並べたところでランプをつけてお互いに雄弁を競うのであります。そういうような演説会がよくありました。私は田舎でもう十五、六才ごろで、やはり演説のはやっておった時節であったとみえまして、盛んにやっておりました。いろ〳〵の地方のいわゆる青年有志の間に入って生意気ながら演説をしば〳〵やって、大いにおもしろがっていたのでありますが、慶應へ入りましてからももう演説なんか止めよう、そんなことはよして静かに本式に勉強したいものだ、こう考え

まして塾へまいりまして演説はやらぬということに決めておったのであります。そして童子寮で演説会があるというので、皆でここへ集まりますけれども、なるべく私は後ろの方でおとなしくしておる。ところがある晩ランプをもってここへ集まってやっておりますと、突然ランプの明りが消えた、何か風の都合であったのでありましょう、ランプの明りが消えてまっくらがりになった。ところが暗中声あり、「われに燈を与えよ」という叫びがあった。われに燈を与えよとは誰が言ったかというようなことで、それから詮議立が始まりまして、結局あれは林であったらしい、林があんな生意気なことを言ったのならきっとあいつは演説ができるに相違ないから貴様やれ、こういうようなことをしきりに言われて、とう〳〵化の皮が現れて、よろしい一つ俺もやろうということでとう〳〵仲間入りをさせられてしまいましたが、その話を長く忘れておりましたところが、当時童子寮のわれ腕白仲間の一人の山本久三郎君が憶えておりまして、そうしてこういう話もあったということで、大分前でありますが、大いに笑い合ったことがあったのであります。

そういうふうで、暗いところでただランプを一つもって青年が集って演説を始める。またいよ〳〵先生たちが集ってやるときもわづかにランプの光で話を聴くという状態で、しかも福沢先生の出られる三田演説会のときは塾生だけではなく、三田以外の遠方からわざ〳〵足を運んでここへ聴きに来るものも多いということで、なか〳〵盛んなものでありました。そうしてその三田演説会では野次が名物であります。どんな先輩であろうとも勝手放題野次りで飛ばすというようなことが当時のはやりであった。学生等は天下御免であります。勝手な野次を飛ばす。先輩であろうが何であろうが遠慮会釈はない。仲間の友達、若い先生などはなおさらであります。わざく塾外の相当な人をお招きしてお話を聴くというような、そういうときにも敢て不礼を顧みず勝手放題の野次を飛ばすというので、いささかひや〳〵思う場合もあった。甚だしいときは福沢先生がこっそりと

陰のところから演壇に顔をお出しになって、そうして満場を見渡して静かにしろと言わんばかりに気を配られたこともあったと記憶しております。

そういうわけでありますから、この三田演説会で鍛え上げた人は一廉の弁論家であります。到るところどういうところへ出ようとしても大いに弁論をもって一席きりまくっていこうというような意気もあれば、またそれだけの練習も自然積まれておったわけであります。当時慶應義塾は、それはその前、明治初年からそうでありますが、慶應義塾というものは今で申すならば、一種の広い意味の政治学校であったと思うのであります。私は終始そういうふうに考えております。決して実業界に出て月給取になるようなものを養成するとか、クラーク・シップを養成するとか、そういう考えは毛頭ない。読むところの書物は何であるかといえばアメリカのウエブレンの経済書とか、そういうものを一番初めに読まされたようでありますが、主に英国の自由主義者の先輩スタンダード・オーワー、ミルとかスペンサーの書物、ミルのは有名な経済書もありますが、殊にあの「オーンリバティ」というようなものは教科書として必ず読まされたのであります。ミルの自由の自がよくわかるようになれば英語の先生になる資格ができたというほどちょっと読みにくいむづかしい本であったように思いますが、そのミルの「自由論」とか、スペンサーの「非干渉論」、バジョウトの「イギリス憲法論」、そういう種類のものが読まれておる。経済書とか政治に関するもの、まあ十分な深い勉強はできる筈はありませんが、とにかくイギリスの自由主義の大先輩の、みなクラシックというほどの立派な書物を教科書にして読んでおったものであって、それは自然アングロサキソン流の自由主義の鼓吹となったわけであります。むろんその他に俸給をいくらやるとか何とかいうこともいくらかあったようでありますが、大体の骨子は西洋の自由の思想を大いに吹きこむ、口を開けば天下の政治経済、大きな社会の問題等を論じて、堂々たる政治家気取というか、そ

ういう心持で天下のことを論ずる。作文というのが当時は名物でありましたが、必ず学生は作文を書かされた。その作文の題というのが決して文章を直すような漢字の先生とか、そういう文字の先生は題を出さない、題は必ず最高級の幹部の先生方が出しておった。菅野先生とか鎌田先生とか、一番上の人たちが出題をする。それは大てい世の中の活きた実際問題をとらえて文章を書かせる。日常の新聞を読むにしてもそういう経済、政治、社会各方面の活きた問題を絶えず頭に考えて目を通しておらなければならぬというような仕組になっておりましたが、そういうことでいわば広い意味の一種の政治学校の教育のようなことで、これについて学んだ当時の塾の卒業生というものは腰弁で官吏となろうなどというようなことは一切潔しとしない、ただクラークになって金を儲けようというようなことは考えもしない。何となく自ら天下をもって任ずるというような、少し高い見識をもっておったようであります。従ってそれらの人達は新聞記者となれば堂々たる記者となり、それから新聞界、たとえば時事新報などに一時手伝いかたぐやっておったという人で直ぐ後で実業界に転身するというような人も少くありませんでしたが、実業界に入っても普通の実業学校から育ったというような人間とは違う。どことなく一種の抱負見識をもち、実業界においても小憎らしいような小さな型の人間ではなくして、やや大型の仕事のできるような人が多かったようであります。これを政治家にならせようと思えばいつでも堂々たる政治家になり得るというような素質を相当もっておる。そういうことでどことなく見識もあり、抱負もあり、ただクラーク・シップに甘んずるようなものではないというような、そういう意気込の共通の点があったように思うのであります。

このようにこの演説会は塾の若い人達に自由の精神、独立の精神を吹き込む最も重要なる機関となっておったわけであります。演説ということを福沢先生が考えつかれて、日本語でも演説をやろう—森有礼というよう

な当時の先覚者のような人が日本語では演説はできない筈である、こういって反対したこともあったようでありますが、あのもの識りで新知識と思われるあの森有礼その人が日本語では演説はできないといって福沢先生の説に反対したこともあるというのでありますが、そういう時代に演説といものを始め、これによって演説の技術を練習する、そうしてその意味においての日本の文化の上に大いなる貢献をするということになったばかりでなく、それはもちろんどちらかといえばそういう問題、演説の技術を練習させ、演説をすることを覚えさせたというようなことはむしろ軽い方であって、その演説を鍛うというこの三田演説館というものが日本における自由主義の一大鼓吹場となり、自由独立の精神の揺籃場となって、意気なお盛んなる青年をこの会堂から世の中に送り出したという点に最も私は記憶せらるべきものがあると私は思うのであります。

願くばこの三田演説館が立派に修復もできまして、これからいろ〳〵利用されることであろうと存じますが、どうぞこの演説の技術をここで練り、そうして盛んに弁論の雄となるということを希望するのでありますが、同時にこの会堂に至れば何十年前日本の自由主義の揺籃場として非常な貢献をした。そのときのことを追懐し、われ〳〵先輩の諸君がこの会堂の中で如何にその識見を磨き、その気焔を上げ、そうして如何なる抱負をもって日本の新社会の指導者としてここから奮い立っていったか、そこに大いなるインスピレーションを得て慶應義塾の生命をますます深く、ます〳〵広く意義あるものにしてほしいと思うのであります。この慶應義塾の演説館は塾のごく古いものでありながら、実は新しい生きくとした精神がこの中には満ちておる筈である。それを塾生諸君がこれを利用するとともに、この新しい息を吸い込んで、それより大いにインスパイヤーせられて、慶應義塾の大をしてます〳〵大ならしめるような発展を見たいものだと存じます。これだけのことを申し上げて私の責を塞ぎます。（了）